

大学進学に対する出身階層の直接効果と間接効果

——相対的リスク回避仮説の規定構造の再検証——

成蹊大学 川端健嗣

1 目的

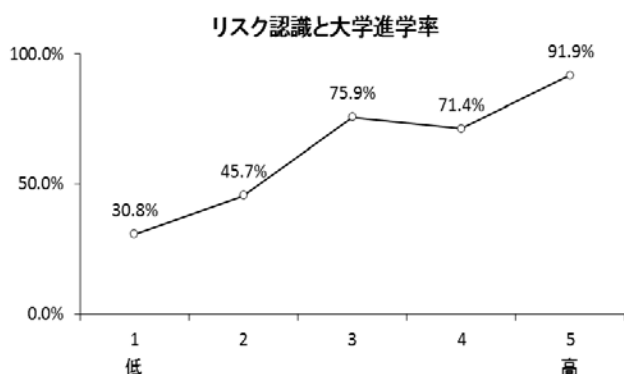
本報告は、出身階層が進学にたいし、直接効果と間接効果のどちらを持つのかを実証的に検証する。教育達成の階層間格差を説明するものに、「相対的リスク回避仮説」がある（Breen and Goldthorpe 1997）。従来、この仮説検証において進学のリスク認識は、出身階層（父親の職業）によって測定されてきた。このとき、出身階層がリスク認識を媒介として、進路選択に影響を及ぼすと仮定されている。したがって、媒介効果がすべてであり、進路選択に直接の効果を持たないはずである。しかし、出身階層には、家業を継ぐなど直接効果も考えられる。そのため、出身階層の直接効果と、リスク認識を通じた媒介効果が、進学をどのように規定しているのかは未解明であった。

2 方法

そこで本報告は、リスク認識を出身階層とは別に測定し、それぞれが進学に対してどのような効果を持つのかを分析した。データは、ランダムサンプリングによる「2017 年西東京市民調査」を用いた（22～69 歳個人を対象とした郵送調査、有効回収 296 ケース、有効回収率 59.9%）。リスク認識は、「あなたが 18 歳のころ、『自分は大学に進学しないと将来こまる』と思っていましたか」と質問し、「1 そう思わなかった」から「5 そう思った」まで 5 つの選択肢で回答してもらった。

3 結果

リスク認識を従属変数とした回帰分析の結果、出身階層は有意な効果を持たなかった。他方で、大学進学を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果、出身階層のうち父職マニュアルとリスク認識のそれぞれが、有意な効果を持った（表、値は回帰係数）。したがって、出身階層もリスク認識も、それぞれが独立に影響することが示された。



大学進学を従属変数としたロジスティック回帰分析

男性ダミー	0.014
年齢	-0.002
父職 専門・管理	0.671†
父職 マニュアル	-1.075**
リスク認識	0.753***
Nagelkerke R^2	0.416
-2 対数尤度	256.881

4 結論

本報告は、リスク認識が出身階層とは独立した規定要因として、進学に作用していることを示した。この結果は、格差存続の要因として、経済資源や文化資源ではなく、リスク認識という意識に着目する相対的リスク回避仮説の特徴を、よく捉えている。リスク認識がどのようにして形成され変化するのかを問うことが、次なる課題として残った。

文献

Breen, Richard, and John H. Goldthorpe, 1997, “Explaining educational differentials: Towards a formal rational action theory,” *Rationality and Society*, 9(3): 275-305.

川端健嗣, 2018, 「相対的リスク回避仮説における「リスク」の測定と効果——出身階級とリスク認識はいかなる関係性にあるのか」『成蹊大学文学部紀要』53: 165-75.